『学校』一九五六年十一月号（新日本教育協会）

マスコミと学力問題

矢口　新

マスコミと学力問題という妙な題を与えられた。はっきり断ればよかったと、後悔している。どうも無理に結びつけたような題であって、たいして言うことはなさそうである。

責任はマスコミにない

マスコミは学力を低下させるか。編集者は執筆依頼のとき、こういうことも言ったように思う。これはどういうことだろう。思うに、アメリカでテレビが普及してから、子どもが勉強しなくて困る、一日中それにとりついていて、勉強しなくて、そのために学力が低下するとさわがれたことがあったそうだが、そんなことを頭に思い浮かべていたのではないか。なるほどそういうこともあろう、勉強しなければ、学力は低下するにきまっている。これは何もマスコミのせいではない。勉強しないせいである。

学力低下の原因をテレビに押しつけたら、テレビはおこるだろう。テレビは何も強制しているわけでないのだから、自分の好きでテレビを見て、自分の好きで学力が低下したのではないか。見当ちがいもはなはだしいと言うだろう。そう言われれば一言もないのである。

これによく似たことは、まだほかにもある。マンガについてである。マンガばかり見ているので子どもの読む力が低下してきたということがよく言われる。これも、読む力が低下したのは本を読まないせいであって、マンガを読んだせいではない。マンガは何も読むことを強制しているわけではない。やはり見当ちがいの論である。

まだある。今度は映画についてである。映画ばかり見ているのでどうもこのごろの子どもは考える力がついていない。あまり簡単にわかりすぎるから、自分で苦労してわかるまで考えることをしないというのである。考える力、問題を解決する能力という意味の学力の低下である。これもしかし映画のせいでなく、見る者がなまけているからであって、自分でそうしているのである。自分で考えないのが原因であって、それを映画に押しつけるのは、見当ちがいだといった方がよさそうである。

マスコミが学力を低下させるというのは、マスコミに言わせればデマだということになりそうである。学力問題は何もマスコミの知ったことではないのである。むしろこちら側の問題ではないか。

最低をねらって

マスコミが子どもの興味を暴力的にまでひきずってゆく。学校で身につけさせようとしている力をもたなくても理解できるようにしてあり、また性格上そういうものもある。いわば最低限の力で、それを吸収できるようになっているのである

これは何も子どもの場合ばかりでない。おとなの世界だって、最低のおとなを相手にしているのである。あらゆる種類のマスコミがそうである。その中で比較的むつかしいのは

新聞であろう。それも一部の記事である。

おとなでもマスコミだけを相手にしていては、利にならないことは確かである。だから気のきいた人は、映画もあまり見ないし、ラジオもとくにこれとえらんで聞くし、テレビもそうだし、新聞だって、気をつけて読んでいる。それぞれうそもあるし、間違いもあるし、通俗的であることを注意しているのである。

だれにでもわかるということを考えてつくられるから、むつかしい学問のことなど伝えようとしても本当には伝わらないのがあたり前である。誤解を生むようなすきだらけの伝えかたがなされるのが当然だともいえよう。なにしろ大衆相手だから、あまりむつかしく、めんどくさくやったのでは、もてないのである。大衆のお気にめすようにやっている。おとながマスコミで勉強しようと思ったら、ひとびとの余り好まないものを見たり聞いたりしたらよい。そういうのは少しむつかしいところがあって、勉強になると思って間違いないのである。

かつて戦前に徴兵検査があったが、その時に学力検査というほどでもないが、ごく簡単な学力検査をした。この時の結果を一口でいうと、二〇歳になった日本人の平均の学力のレベルは小学校四年程度であるといってよい。これは今日もたいしてちがわないだろう。これはなかなか意味のあることで、マスコミはすべて小学校四年程度で表現したら、最も多くの人を相手にすることが出来るといってよい。

この点からいうと、新聞は少しむつかし過ぎるともいえよう。『平凡』などという雑誌は、読むところがなく、見るところが大部分で、だれがすべったとか、ころんだとかという記事が多く、考えなければわからないようなことは少しも書いてないから、一般うけがするのである。

以上は、少し大きい人たち、青年からおとなの場合について述べたのであるが、おなじことは、子ども向けのマスコミについてもいえるのである。また小学校も四年以上になると、おとなむけのマスコミをちゃんと吸収できるようになるのである。

学力と経験

マスコミはその本質的ねらいからいって、最低の学力で受け入れられるように考えている。そこにまた意義もあるのである。知識の大衆化の役目も果たすのである。だから学力とは関係のない存在だといってもよい。

ましてこれがコマーシャリズムの線にのると、知識の大衆化でなく、愚劣の大衆化になるのである。だから毛並のいい人種は、商業主義マスコミには寄りつかなくなるのである。

ところで学力というのは、本を読んだり、教科書を読んでいればつくかというとそうでもないのである。とかくひとびとは、本を読むことが勉強だと考えがちだが、それは一部の力である。本を読んで読む力がつく。また、その本の内容にりっぱなことが書いてあれば、内容についても知識を得る。しかし本を読んでいただけでは学力が十分につくとはいえない。

昔からあることわざに、読書百ぺん意おのずから通ずというのがある。ばかばかしいことわざであるが、そういうように昔の人は考えていたのだからしかたがない。わからないことは何べん読んでもわかりはしない。

たとえば、友あり遠方より来る、また楽しからずやというのを昔は五つ六つのころから素読したり、講釈をきいたものである。友とは学問の友のことなりなどといっても、五つ六つではわかるはずがない。わかったつもりでも、それは言葉だけである。いな子どもばかりでない。学問の友がたずねてくるなど

ということは、おとなにだってわかる人は少ないのである。それより一ぱい飲む友だちがたずねてくれた方がよほど楽しいのである。

こんなことを百ぺん読んだってわかりはしないのである。わかることの背後には、経験というものが必要なのである。生活自体がわからせる地盤なのである。

豊富な生活経験ということは、ものがわかるもとなのであり、本当の学力の最も大きい地盤なのである。これを整理し、体系的に理解し、自分で自分の世界を構造づけることの出来ることが学力の最も中核である。

入学試験の力にあらわれる学力などは、本当の学力でない。あれはペーパーテストでやるのであって、しかもそれほど真剣に考えて問題が出されるわけでもないから、簡単にいえば、言葉をおぼえているかどうかということである。学力をみているのではないのである。学の力をみているのではない。その証拠に試験が終るとほとんど忘れてしまうのである。そして、世の中で本当に役立つガクの力は、試験勉強で覚えたことを忘れることによってついてくるのである。現にわたしも、いま高校の入学試験を受けたら落第だろう。大学の試験などは全然受かりっこない。またあんなことばかり覚えていたら、現在のわたしの生活に邪魔になりマイナスになってもプラスにはならない。わたしがもしガク力を持っているとしたら、それは、世の中の実際を見ることによって、またこれを考えることによって身につけたのであって、教科書で覚えたり、本を読んだりしたのではない。

むすび

話がとんだところにいったが、マス・ミディアによって、世の中の現実をわれわれに提供してくれる量はものすごくふえたのである。少なくともそういう可能性はふえたのである。

マス・ミディアは一つの方法でしかないから、その内容をどう提供するかは提供する人によってきまるのである。提供者が、ばかばかしいものばかり提供すれば、愚にもつかないものになり、受けとる人も毛並が悪くなるのである。現に、最近のテレビのように朝から晩までファッションショーばかり提供していれば、これはない方がましだといわれてもしかたがない。

しかし、これが、社会の現実の生活を科学の目をもってさぐるような役目をはたしてくれることになれば、これは、われわれの学力を、本当の学力をつけるのに大いに役立つであろう。そう考えると、現状では文化の利益を殺して使っていることになる。まことに惜しいものである。

誤った学力観、試験のための学力をふきとばすような本当の勉強をさせる機会と可能性をマス・ミディアがもっているのに使われないのである。そしてそのあげくの果ては、だれからもよく言われない。いたずらに、大衆に迎合しているものの姿である。

（国立教育研究所員）